

日本語の複合動詞とテ形動詞の比較

—中国人日本語学習者の誤用を通して—

岳 莎 莎・吉 田 光 演

広島大学大学院総合科学研究科

A comparison of compound verbs and *te*-form verbs in Japanese: With special reference to written errors of Chinese learners

Shasha YUE and Mitsunobu YOSHIDA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract: Japanese has complex verb formations that convert two verbs into a complex predicate. A salient type among them is the compound verb that is made of two verb stems, V1 (*renyoo*-form=continuative form) and V2 such as *nomi-aruku* (drinking walk=barhopping). Although the compound verbs are productive it is often difficult for non-native learners to predict their meanings because there are various ways of semantic combinations between V1 and V2. And even worse for Chinese students learning Japanese, Chinese compound verbs that correspond lexically to Japanese compound verbs are sometimes different in meaning, which may cause errors in acquisition. As a result, learners tend to avoid them and instead to use *te*-form verbs composed by *te*-form V1 and V2 because they are easy to build. But this strategy is not successful when *te*-form verbs don't mean the same meanings as the counterpart compound verbs. In this paper we try to find out the factors of error usage of Japanese compound verbs by learners based on error analysis and to classify their semantic properties (syntactic and lexical

compound verbs and classification by LCS linking etc.). Furthermore, we compare compound verbs and *te*-form verbs with respect to the semantic hierarchy and show at which level they are similar and at which level they differ. Specifically, lexical compound verbs cannot be paraphrased by *te*-forms when V1 or V2 has a metaphorical or formalized meaning.

Key Words: 日本語学習, 誤用分析, 複合動詞, テ形動詞, 意味階層

1. 問題提起・研究目的

日本語の複合動詞の顕著な特徴の一つは、「動詞連用形 (V1) + 動詞 (V2)」という形式を取ることであり、複合動詞の意味は、基本的にV1とV2それぞれの意味の相互作用によって構成される。しかし、多くの複合動詞では、V1とV2の結びつきの仕方は一様ではない。従ってV1とV2の意味から複合動詞の意味を予測することはしばしば困難を伴う。特に、日本語を外国語として学習する学習者の場合は、既習得の知識に頼って複合

動詞の意味を理解しようとする傾向がある。例えば、中国語を母語とする学習者の場合、中国語の意味に対応する二つの動詞を組み合わせることで、自分自身で複合動詞を作り出してしまい、その結果、表現しようとする意味と実際に表された日本語の意味が異なるという誤りをおかすことがある。例えば、次のような誤用例がよく見受けられる（(1)は佐治(1992:215)から引用した例）。

- (1) *私はいつも寝すぎることがあります。
 (寝過ごす) (*印は学習者の誤用を表す)

中国語を母語とする学習者は、(1)の「寝すぎる」という表現によって「起きるべき時刻を過ぎて、さらにまだ寝る」という意味を表現しようとした。しかし実際は、「寝すぎる」は「寝る時間が長すぎる」の意味である。中国語の「睡過(頭)」との類推により、二つの動詞に対応する日本語「寝る」と「過ぎる」を直接結びつけて「寝すぎる」を使った結果、誤用となってしまったのである。このような誤用の事例から、複合動詞に対する学習者の理解が「二つの動詞の単純な組み合わせ」程度にとどまってしまっていることが見て取れる。日本語教育の観点からすれば、教師は、このような状況に対して学習者の側が間違っただけの思い込みを抱く以前の段階で、学習者に正しい理解を促し、複合動詞を適切に教えるための工夫をしなければならないだろう。

また、森田(1978:73)が指摘するように、「学習者が日本語を学ぶ場合、教科書によって与えられる動詞の殆どは単純動詞である。学習者は個々の単純動詞の意味、用法に習熟するが、それらの動詞を組み合わせた複合動詞については学習の機会があまりない」という現状で、複合動詞について集中的に教わる機会が少ない。

このように、外国語として日本語を学ぶ学習者は、初級段階では日本語の複合動詞に接触する機会が少なく、それが使われる環境についてもよく理解できない。そのため、学習者が複合動詞を使用することを避けて複合動詞と意味の近い近似的表現によって代用するということが十分予測できる。例えば、次のような例である。

- (2) a 玄関付近で「開けて」と泣き叫ぶ声が響くこともあったという。
 b 玄関付近で「開けて」と泣いたり叫んだりする声が響くこともあったという。

例(2)のような場合、複合動詞の「泣き叫ぶ」とその代用表現「泣いたり叫んだりする」(～たり～たりする)の意味はほぼ同じなので、一方が正しく、もう一方が間違っているとは言えない。ただし、学習者が複合動詞表現を既習の初級レベルの表現形式によって常に言い換えている限り、複合動詞について十分習得できないという問題は解決しない。しかも、中級・上級レベルに進むに従って、複合動詞の登場頻度が増え、複合動詞の習熟と使用はさらに要求されることになる。このような状況から、日本語学習者における複合動詞の習得の重要性が推測できるだろう。

本論文は、日本語を外国語として学習する学習者(特に中国語を母語とする日本語学習者)の誤用から出発し、複合動詞の習得に関する問題点を考察する。複合動詞の習得に影響をもたらす要因は、母語(例えば中国語)の影響(否定的干渉)、動詞の自他対応の習得の困難、類義表現による代用の問題などが考えられるが、本稿では、特に複合動詞の類義表現の影響に注目して複合動詞との関連を分析することにする。学習者が日本語複合動詞を学習しても、なかなかそれを適切に使えない原因として、より簡単な表現形式(「…たり…たりする」,「テ形(動詞の連用形に接続助詞「て」が続く形式)」など)の類義表現によって代用することが考えられる。そこで、本稿では、日本語複合動詞はどのような場合にテ形に言い換えられないのか、従って複合動詞を使わなければいけないのかを言語学的に分析し、これを学習者に明示的な形によって提示することを目的とする。

以下、2節では、学習者の典型的な誤用例を検討し、複合動詞を習得する過程で生じる問題点を考察する。3節では、関連する先行研究を概観し、複合動詞の分類、テ形との関連を考察する。その際、語彙的複合動詞とテ形の意味用法が非常に類似していることを明らかにする。4節では、単純動詞の意味用法と、複合動詞の中の前項動詞また

は後項動詞の意味用法とを比較することを通して、テ形に言い換えられる複合動詞の意味的性質と、テ形によるパラフレーズを許容しない性質を究明する。最後に、この結果を学習者に提示することによって誤用が避けられ、複合動詞の理解が促される可能性を示唆する。

2. 誤用例の分析

2.1 誤用分析の重要性

まず、学習者の誤用分析の意義について考える。誤用分析の重要性として度々指摘されることは、学習者、教師と文法研究者の三者ともに誤用分析が重要な意味をもっているということである。

まず、学習者自身にとって意義がある。誤用とは、学習者自身が学習した文法規則を実際に試して使用する際にひき起こされた事例である。自分自身が間違っただころを教師によって指摘されて初めて自分の弱点に気づくことができる。すなわち、誤用が訂正されることを契機として、語彙や文法の具体的習得が進むのである。

次に、誤用が重要性を持つのは教師である。教師が学習者の誤用を見つけ、それを分析することを通じて、学習者が日本語を習得する過程で遭遇した問題について具体的に認識できるようになる。その結果、どの学習項目に力点を置いて教えるべきかが理解できるようになる。

最後に、文法研究者にとっての意義である。学習者が誤用をひき起こす原因は、学習者の母語からの干渉、複合動詞の類義表現による代用など、さまざまな要因がある。その原因を究明するためには、日本語と学習者の母語（例えば中国語）の二つの言語の対照研究や類義表現の比較分析が必要になる。誤用データに基づいて、文法研究者がこうした研究を行うことで、個々の言語の文法を解明し、言語運用に即した文法規則を記述することができるようになる。

2.2 複合動詞の誤用例

以上の点を踏まえ、本稿での複合動詞の考察を日本語学習者の誤用の分析から始める。学習者は、複合動詞を習得する際に一体どのようなところで

よく間違っただろうか。日本語教師は、どの点でより注意を向けなければいけないのか。これらを明らかにするため、複合動詞に関する学習者の誤用例を挙げてみよう(例(3)(4)(5)(6)は佐治(1992: 208, 211, 218)からの引用)。

(3) *この記事を読んで、胸を撃たれ、思わず暖かい激流みたいなものが込みあがってきた。(こみ上げてきた)

(4) *この作文のテーマをきっかけとして、男女平等の問題について、いろいろ思い込んでいた。(考えていた)

(3)は、複合動詞の誤用例としてよく出てくる自動詞と他動詞の組み合わせの問題である。(4)は、母語(中国語の「沉思」からの間違っただ直訳)の干渉によって、「込む」を後項動詞として前項「思う」に付加したものであるが、日本語の「思いこむ」の意味とは異なる。母語の干渉と複合動詞に関する理解不足によって生じた誤用例である。

(5) *乗客はずいぶん興奮して...叫んだり、はては飛んであがったりしており...(飛び上がった)

テ形の「飛んであがる」を使うと、かなり高いところをめざして移動する意味になるが、この場合、翼のない人間が空中を飛ぶのは不可能であり、容認不可能な意味になってしまう。ここでは、地面を足で蹴って跳躍する程度の「上方移動」であるので、「飛びあがる」という複合動詞を使わなければならない。

(6) *乗客を回って見ると、メガネをかけたインテリもいれば、[中略]サラリーマンもいれば...[以下略](見回すと)

「回って見る」と表現すると、車内をぐるぐる歩き回って見るという意味になる。ここではそうではなく、立ったままで、目で次々と視線を移動させて見ているのであるから「見回す」という複合動詞を使用しなければならない。

(5)(6)の誤用例は、複合動詞とテ形を混同することによって生じた問題である。このように、日本語学習者の複合動詞と(テ形のような)代用表現の誤用には、複合動詞に関する理解不足からこれを回避してテ形を使用した結果、意味的・文脈的に不適切なテ形の使用となる事例が多い。そこで以下では、二つの動詞を結びつける形態論的形式として典型的である複合動詞とテ形とを比較し、それを通して両者の統語的・意味的な相違を探し出し、それによって、日本語学習者の複合動詞の誤用の原因を特定することとする。

3. 複合動詞の分類とテ形との関連

3.1 統語関係からの分類

複合動詞は多種多様な結合様式を持つので、複合動詞を分類するには、文法や意味などの複合的な観点を重ね合わせることによって分類の方法を考えていかねばならない。その中でも、影山(1993)の分類は、生成文法の立場から複合動詞の「派生過程の違い」に着目し、複合動詞を大きく2種類に分類している点で広く受け入れられている。それは以下の、「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の分類である(影山(1993)、影山(1999)など)。

・A類 語彙的複合動詞

- (7) 押し開く 話しかける 働き疲れる
 転げ落ちる 持ち去る 飲み歩く
 語り明かす 恋い慕う 聞き漏らす
 泣き止む

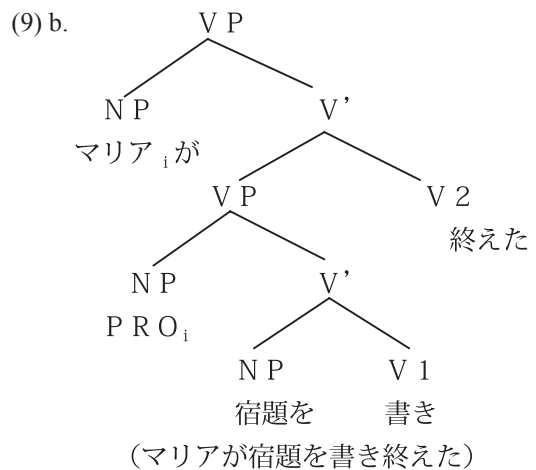
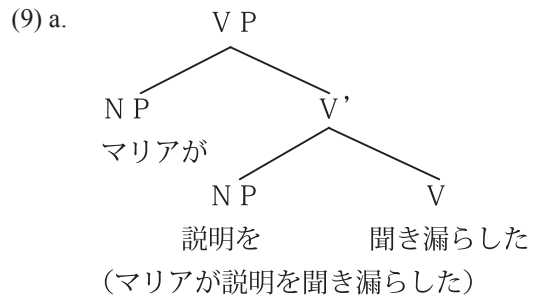
語彙的複合動詞は、(心的辞書としての)語彙部門で二つの動詞が結合したものであり、二つの動詞は形態的に緊密に結びついており、さらに意味の習慣化と語彙的な結合制限を備えている。例えば、「飲み歩く」という複合動詞の使用は、習慣的・語彙的に対象が酒類である場合に制限されている。それに対して、統語的複合動詞の「飲み始める」においては、飲む対象は酒類に限られず、どのような液体飲料でもよい。語彙的な結合制限に関しては、後で詳しく述べる。

・B類 統語的複合動詞

- (8) 話し終える 食べ過ぎる 助け合う
 降り出す 見通す 食べかける
 書き直す 走りぬく しゃべり続ける
 聞き忘れる

統語的複合動詞は、句や文を形成する統語部門に近い表層レベルで形成された複合動詞であり、意味の透明性と生産性において、典型的な語よりもむしろ普通の文や句に近い性質を備えていると言える。このような性質は統語的な構造に由来することを影山(1993: 79)は明らかにしている。

以下の樹状図(9a)が示すように、統語レベルでは、語彙的複合動詞は一つの語(動詞V)としてとり扱われる。それに対して、(9b)が示すように、統語的複合動詞は、統語的には二つの別々の動詞、即ち、V1 = 「書き」とV2 = 「終えた」がそれぞれ独立した動詞になっている。



語彙的複合動詞「聞き漏らす」は通常他動詞と同じく動作主と対象の2項を取る。従って、(9a)では「マリア」と「説明」の2つの名詞句(NP)が項として現れる。一方、(9b)のように統語的複

合動詞「書き終える」では、深層構造レベルで埋め込み動詞句 (VP)である「PRO (見えない代名詞) が宿題を書く」と、「マリアが (VPを) 終えた」という上位動詞句の複文構造になっている (PRO=「マリア」の関係)。表層構造レベルで、「書き」が「終える」に編入されることによって、この複文構造が一つの構造として統一される。

語彙的複合動詞と統語的複合動詞の違いは、「そうする」のような代用表現の置き換えや、尊敬表現への置き換えによって明らかになる。

(10) a. *太郎が隣人に話すのを見て、次郎もそうしかけた。(話しかける→*そうしかける) 語彙的複合動詞

b. 太郎がまだしゃべるとを見て、次郎もそうし続けた。(しゃべり続ける→そうし続ける) 統語的複合動詞

(11) a. 先生は学生に話しかけた。→*お話しにかけた 語彙的複合動詞

b. 先生は学生に話し始めた。→お話しになり始めた 統語的複合動詞

語彙的複合動詞は、形態的に緊密な語のまとまりを保持しているので、(10a)(10b)のように、「そうする」のような一部の代用、V1の尊敬語への置き換え(語の中への割り込み)を許容しない。つまり、語彙的複合動詞は形態論的には一つの語彙としてみなされる。他方、統語的複合動詞は、表層では一つの語(動詞)として融合しているが、深層では二つの動詞であるため、「そうする」、尊敬語のような語の内部への割り込みが可能になる。このように、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の区別は形態論的・統語論的に明確に区別された分類であると言える。

3.2 意味構成からの分類

由本(2005)は、影山の上記の分類を踏まえ、さらにV1とV2の意味関係に着目して、語彙的複合動詞を5つのタイプに分けている。それは、次の並列関係、付帯様態、手段、因果関係、補文である(由本2005: 108f.)。LCSは、語彙概念構造(lexical conceptual structure)の略であり、AND、

WHILE, BY, FROMは語彙概念構造を結びつける意味述語である。

(12) 並列関係: 泣き叫ぶ, 恐れおののく, 恋い慕う

V1(泣き)+V2(叫ぶ) →

[[LCS1] AND [LCS2]]

付帯状況・様態: 持ち寄る, 遊び暮らす, 飲み歩く

V1(持ち)+V2(寄る) →

[[LCS2]
WHILE [LCS1]]

手段: 切り倒す, 勝ち取る, 泣き落とす, 奪い取る

V1(切り)+V2(倒す) →

[[LCS2]
BY [LCS1]]

原因: 遊びくたびれる, 溺れ死ぬ, 流れ着く

V1(溺れる)+V2(死ぬ) →

[[LCS2]
FROM [LCS1]]

補文: 書き落す, 見逃す, 使いこなす

V1(書く)+V2(落とす) →

[LCS2...[LCS1]...]

例えば、「遊び暮らす」は2つの動詞によって表された語彙概念構造がWHILE(付帯状況・様態)によって結合し(「Xが遊ぶ」様態を伴って「Xが暮らす」)、「切り倒す」は二つの語彙概念構造がBY(手段)によって結合する(「XがYを切る」ことによって、「XがYを倒す」といった関係が表される。日本語は主要部後続言語であるので、複合動詞の主要部は後項動詞(V2)であり、語彙概念構造(LCS)の表示もLCS2が中心となる([LCS2] WHILE [LCS1]のように)。LCSに関しては、さらに動詞の概念的意味、アスペクト意味が詳しく規定されるが、ここでは触れない(影山(1993), 由本(2005), 影山・由本(1997)などを参照)。

さらに、姫野(1999)は、前項・後項動詞の意味構成の観点から考察して、複合動詞の分類の試案を提起した。その分類方法は、二つの動詞を組み合わせる前に単独で使用された単純動詞の意味

と、組み合わせた後でできた複合動詞の内部での動詞の意味を比較して、それらの特徴を重視したものである。特に、単純動詞を既に習得した学習者を念頭に置いた場合、動詞単独で扱われる場合の意味と複合動詞の意味とをいかに関連づけて理解するのかを教示されれば、効果的に複合動詞を習得することができる。この意味で、姫野の分類は日本語教育の観点で重要な意味があると考えられる。そこで、姫野の分類を具体的に考察することとする。

姫野(1999)の分類をまとめると、語彙的複合動詞のほとんど(補文関係、比喩関係以外)は、二つの動詞を使ってそのまま「テ形」などほかの表現に言い換えられるが、統語的複合動詞はすべてテ形への言い換えが不可能であるということが出来る。(姫野 1999: 20).

(13) 語彙的複合動詞からテ形への言い換え

(並列、付帯・状態、手段、原因は可能)

並列：泣き叫ぶ → 泣いて叫ぶ

付帯・状態：持ち歩く → 持って歩く

手段：焼け死ぬ → 焼けて死ぬ

原因：流れ着く → 流れて着く

補文：鳴き交わす → 鳴くことを交わす

(*鳴いて交わす)

比喩：書き殴る → まるで殴るように乱暴に書く (*書いて殴る)

一方、統語的複合動詞は、文に近い性質をもつため、これを言い換える時は「...することが...する」「...することに...する」「...することを...する」などの形になる(「話し終える」→「話すことを終える」など)。従って、テ形への言い換えは許されない。

3.3 テ形の用法の分類

動詞の連用形(テ形)は、節を繋いで文を拡張し、いろいろな機能を持つ形式である。ここで、複合動詞の用法と比べるため、複合動詞に意味的に近いテ形の用法を見ておく。(「テ」：テ形、「複」：複合動詞の略)

(14) a 並列

テ：いじめられている子供が、泣いて喚いて助けを求めることができる人が子供には必要なのです。

複：花子ちゃんは同室の子のおもちゃを奪ったり、泣き喚いたりおもらしをしたりといった「赤ちゃん返り」の行動が続いた。

b 原因

テ：外で働いて疲れた女性に食事の支度を下ごしらえからきちんとするをを求めるのは酷だ。

複：母は毎日働き疲れた様子で、家は極貧状態。私の幼児の記憶は、いつも祖母や父母の悲しげな姿につながる。

c 付帯・様態

テ：歴史ある名木や巨木を、ソラール元職員案内で見て回る。

複：地元に住む87歳の男性は内部を見回った後、「日本と中国の将来...」と話した。

d 手段

テ：(髪の色)は落ちやすいと聞いていたので、とにかく、毎日洗って落そうと思った。

複：大気の汚れを洗い落す雨上がりの翌日、早朝に富士山が見えることがある。

既に見てきたように、二つの動詞が結びつく形式には二通りある。「て」の形に続くもの(テ形)と、動詞の連用形に続く形、即ち複合動詞である。具体的には、後者の中の前項動詞に接続助詞「て」を挿入することによって、「て」で二つの動詞を結びつける形になる。「て」は、前項・後項の動詞の意味関係を変えないので、(14)のように、複合動詞の場合と類似した並列・原因・付帯・手段といった意味用法を持つこと自体は不思議なことではない。

3.4 テ形による言い換えの問題点

上述の姫野(1999)の分析方法に従って、複合動詞を(テ形を用いて)二つの単純動詞で言い換えることができれば、その意味関係はより簡単に理解することができる。この意味で、姫野の分析方法は、影山、由本などの文法研究よりも学習上実

用性があると言える。しかし、そこでは言い換え・パラフレーズの境界線・限界点が明確に記述されていないため、どのような場合にテ形で言い換えられるのか曖昧であるという問題がある(これは、姫野の分類が日本語教育への直接的な応用を意図したものではないので当然ではある)。それはまさに、1節、2節で見た学習者の誤用例を考え合わせれば、学習者が熟慮せずに一律に複合動詞をテ形によって代用してしまう誤用と重なりあう問題である。そこで、これを一歩進めて、単純動詞と複合動詞の関係づけを一つ一つ対応させて見るだけではなく、さらに全体的に見て、単純動詞と複合動詞の意味的特徴を比較し、その違いを明確にしよう。そうすれば、両者の相違も見えてくるだろう。

語彙的複合動詞の場合、(14)のように、独立して用いられる動詞の形(テ形)で言い換えたからといって、すべての状況で適切な意味に対応するとは限らない。例えば、先に挙げた誤用例で見たように、様態タイプの「飛びあがる」をそのまま「飛んであがる」に言い換えた例がそれである。「飛んであがる」の場合も、「飛ぶ」が「あがる」動作の様態を意図する解釈は可能であるが、しかし、鳥のように空を飛ぶことは人間にとっては不可能である。複合動詞の中での「飛ぶ」の意味は「上に跳ねる」、即ち、「飛ぶ」という動作の初期段階に限定されている。従って、跳躍を伴う喜びを表現する場合、「飛んであがる」は不適切であるが、「飛びあがる」は適切である(「飛び上がって喜ぶ」)。もうひとつ例を挙げると、「ジュースを飲み歩く」と表現すると違和感を覚えるが、それは、「飲む」動詞の対象はすべての飲み物でよいが、複合動詞「飲み歩く」の対象はその中の酒類に制限されているからである。他方、テ形表現「ジュースを飲んで歩く」は、それ自体不自然ではない(「ジュースを飲む」が歩く付帯状況を表す)。

このように検討していくと、語彙的複合動詞の意味は、そのまま前項動詞と後項動詞の本義(本来の語義)の単純な組み合わせになるわけではないことが判明する。この点に、テ形とは異なった複合動詞の文法形式の相違を見つける可能性が存在していると思われる。そこで、次節ではこの問

題を詳しく分析することにする。

4. 単純動詞と複合動詞の意味階層の比較

4.1 動詞の意味階層

前節で見たように、ひとつの語にひとつの意味が1対1の形で対応するとは限らない。ある語が他の語と結合することによって、語の意味の範囲がさまざまに規定されることがある。語の結合方式についても形態・統語的・文法的にさまざまな仕方がある。語彙レベルでは、例えば、複合動詞、テ形などがあり、文法レベルの結合としては、例えば格助詞による結び付き、慣用句などがある。

そこで一例として、動詞「見る」の意味が、他の語との結合によってどのように変化するかを観察してみよう。「見る」は、本来「自分の目で実際に確かめる」(「広辞苑」)の意味であり、それが人間の判断と結びつくことによって、「様子を見る」の意味に変化・拡張する。判断の観点を拡大していくと、「味を見る」などの転義的(派生的)な意味になる。さらに、見る行為によって、さまざまなことが体験できるようになり、転義的・派生的意味へと拡大する(「湯加減を見る」「子供の面倒を見る」「余裕を見る」など)。マイナスの意味に転ずると、不利益をもたらす出来事に遭遇する「ばかを見る」の意味にもなる。こうなると意味の比喩化(メタファー)と言ってもよい。以上を整理すると次のようになる。(15)は、森田(1994: 275)の動詞の「本義」、「転義」、「抽象化」などの概念を参考に分類したものである)

(15) 「見る」の語義変化

本義(原義)...自分の目で実際に確かめる。「芝居を見る」

転義(派生義)...考察する。調べる。「様子を見る」「脈を見る」

抽象化.....自分の判断で処理する。「味を見る」「政務をみる」

比喩化.....目で見たとように身に遭遇する。「ばかを見る」「ひどい目を見る」

これらの使い分けは、結局、動詞「見る」がどのような語と結びつき、共起するかによって生じる、いわば文法的な結合であると考えられる。これが、語彙的結合である場合にも、上記のような語義変化が見られるのだろうか。例えば、次の複合動詞の場合を観察してみよう。

(16) 「見～」

本義による複合...	見合う	見上げる
	見聞く	見返る
転義による複合...	見当たる	見直す
	見比べる	
抽象化による複合...	見限る	見込む
	見立てる	
比喩化による複合...	見知らず	見知る

このように、複合動詞の場合も、その基になる単独で扱われる単純動詞の語義とほぼ歩調をそろえて変化する。しかし、複合する一方の語の意味の関連から見た場合、語全体としての意味は、(15)のような文法的結合の場合とはやや性質が異なる。例えば、「実物と見本を見て比べる」というのは、単純動詞の本義をつなげた「目で見た様子を比べる」意味として理解することができる。しかし、複合動詞として「実物と見本を見比べる」として表現する場合は、目で見るだけでなく、手で触ったり、舌で味わったりしてもかまわない。このように、複合動詞になると、転義的・比喩的な意味に容易に拡張することができるようになると思われる。

4.2 複合動詞の意味階層

森田(1994:281)によれば、『例解国語辞典』(1956)を調査した結果、日常的に使用している動詞の四割が複合動詞であり、その総数は1,817語になるという。この語数だけでも日本語を学習する際に、複合動詞が重視されるべきであると言える。しかし、複合動詞の問題は、単に語彙数の上での量的問題だけにとどまらない。上述したように、その語が他の語と連結することによってどのような意味を添えていくか、原義から著しく離れた意味に転化していく場合があること、語彙的に結びつく

前の二つの単純動詞から複合動詞の全体的意味が推測しにくいことが大きな問題となる。

そこで、この問題を詳細に検討するために、語義の問題について詳細に研究した森田(1994)の「複合動詞の階層性」を紹介し、それに基づいて考察を加えよう。森田(1994:289)は、語義結合の度合いから複合動詞を次の5つの段階に区分している。

・第一段階、並列段階

二つの動詞が結びついて生ずる意味関係として最も単純なものは、二つの動詞が対等の関係で並列する「...して...する」形式である。複合動詞の中には、(17)のような「て」を媒介する言い方と、「て」を介さずに直接複合するものの二種類があり、どちらも使用できる語がある。

(17) テ形 複合動詞

切って落とす	—	切り落とす
飲んで歩く	—	飲み歩く
泣いて叫ぶ	—	泣き叫ぶ

・第二段階 主述・補足の関係

前項・後項の動詞がそれぞれ独立した意味を持ち、それが並列関係でなく、次のように、一歩進んで「主語—述語」、補足の関係を構成することがある(由本(2005)、姫野(1999)の補文関係と対応)。

(18) 響き渡る	←	響くことが渡る
食べ慣れる	←	食べることに慣れる
書き誤る	←	書くことを誤る

・第三段階 具体的な意味から抽象な意味へ

複合する二つの動詞のどちらか一方の動詞が本義から離れて転義的に用いられる場合がある。この場合、複合動詞全体の意味も変化する。

(19) 切り落とす	—	泣き落す (転義的)
投げ上げる	—	込み上げる (転義的)
押し込む	—	覗き込む (転義的)

・ 第四段階 造語成分への移行

下線部を引いた部分は、それ自体では単独で単純動詞としては用いられないが、複合語の中で生き残り、しかも実質的意味を（漠然とであるが）まだ保持している場合もある。

(20) 考えあぐねる 塗りたくる でっちあげる
 言いそびれる

・ 第五段階 実質的意味から形式的意味へ

一方の動詞の抽象化がさらに進むと、単純動詞の用法はなくなり、実質的意味を失い、接辞のように形式化されてしまう。

(21) 掻き混ぜる — 掻き曇る（急に曇る）
 打ち砕く — 打ち続く（長く続く）
 突き立てる — 喚き立てる（ひどく喚く）
 突き飛ばす — 叱り飛ばす（ひどく叱る）

第一段階では、対等の動作関係が表示されるため、二つの動詞が表す二つの動作が同時に起きても、ある動作に引き続き次の動作が起きてもどちらも基本的に可能である（「泣き叫ぶ」→「泣いて叫ぶ」「叫んで泣く」）。つまり、二つの動作がまだ意味面で独立しており、互いに意味を発揮してあっている並列関係の段階にある。この段階ではテ形によるパラフレーズは基本的に問題ない。

第二段階の主述関係や補足関係を持つ複合動詞は、文に近い性質をもっており、統語的複合動詞が多数含まれているので、テ形によるパラフレーズは不可能である（*売れて残る、*食べて慣れる）。

第三段階にある複合動詞の意味は、かなり抽象化されてはいるが、動詞本来の実質的意味まではまだ失っていないと考えられる。例えば、「泣き落とす」は「相手を元の立場から離す」、「込み上げる」は「感情は体内で上昇する」というように、拡張的な意味による記述が可能である。この場合、容認可能性の点で個々の差はあるが、テ形による言い換えはまだ許容しやすい（「泣いて〇〇を落とす」）。

第四段階では、複合動詞の中に含まれる接頭辞や接尾辞、述語要素などの造語成分は独立した動

詞としてはまったく用いられない（*考えてあぐねる、*塗ってたくる）。

第五段階にある、極度に抽象化された動詞の場合には、実質的意味も完全に失って、単なる強意の接辞として使われている。従ってこれらは、テ形による言い換えをまったく許さない。

4.3 複合動詞をテ形に言い換えるかのテスト

以上の森田(1994)の語義分析を踏まえると、第一段階と第三段階、すなわち、動詞本来の実質的意味がまだ残っている語義結合の場合、「テ形」に言い換えられる可能性があると考えられる。実際に、「～落とす」を例にとって検討してみよう。

(22) 「～落とす」

a. 本来の意味<落下させる>をそのままとどめているもの、「…して落とす」と訳せる。（第一段階 本義）

例 突き落とす 撃ち落とす 切り落とす

b. 「落とす」の意味ではやや発展・拡張が見られるが、やはり「…して…する」の意味関係を取ることができるもの。（第三段階 転義）

例 責め落とす 泣き落す 口説き落す

c. 「落とす」の意味がさらに発展して、「…することを漏らす」の補文関係となるもの。

例 言い落す 聞き落す 見落とす

単純動詞「落とす」単独で使われる場合の意味と比較すると、a) 本義とb) 転義は、単純動詞の場合と一致している。「漏らす」という意味は、「落とす」の転義として存在しているが、複合動詞になると補文関係をとるため、テ形には言い換えられない（*見て落とす）。それに対して、a)とb)に属する複合動詞の場合はテ形で言い換えられる。以上を整理すると、次の(23)のようになる。

(23) 「～落とす」の語彙的複合動詞*

意味	落下させる	従わせる	漏らす
対象	もの	人	ことがら
階層	第一	第三	第二
単独と比べ	本義	転義	転義
例	突き落とす	泣き落す	見落とす
言い換え	○	○	×

(※ 言い換えは「テ形」に限定する。○×の判断はインターネットで例を検索し、テ形の例文があるかにより判断したもの。以下も同様である。)

複合動詞の後項として、使われる頻度が高い語の例をもう一つ挙げる。

(24) 「～着く」の語彙的複合動詞

意味	到着	定着	状態の完全化
対象	場所	場所	自然現象
階層	第一	第三	第五
単独との比較	本義	抽象化	形式化
例	流れつく		
辿りつく	住み着く		
居着く	寝つく		
焼けつく			
言い換え	○	×	×

さらに、複合動詞の前項として、使われる頻度が高い語も挙げておく。

(25) 「取る～」の語彙的複合動詞

意味	手に持つ	手で操る	強調
対象	物	物・出来事	出来事・人
階層	第一	第三	第五
単独との比較	本義	抽象化	形式化
例	取り外す		
取り分ける	取り扱う		
取り締まる	取り調べる		
取り澄ます			
言い換え	○	×	×

複合動詞として結合した場合の動詞の意味と、単独で使われる場合の単純動詞の意味とを比較すると、前者は、後者（単純動詞）の本義ないし転義の段階にある場合にはテ形に言い換えられやすい傾向が観察される。しかし、抽象化ないし形式化の段階まで進むと、言い換えが困難になる。動詞の本義であれ転義であれ、それが他の語と結合する場合、動詞自身の意味を適切に保持しながら複合動詞を作ることができる。従って、その限り

ではテ形による言い換えが可能になると考えられる。それに対して、抽象化、あるいは形式化の意味を取るような動詞が項になる場合は、動詞自身の意味が希薄になったり、消失してしまったりするため、二つの動詞の間に「テ形」を挿入すると、単独の動詞としては容認できなくなるのである。

以上の考察から、今一度最初の問題を振り返ると、(5)と(6)の誤用例をより明確に説明すること

ができる。(5)の「飛びあがる」の「飛び」は単純動詞の比喩的用法を利用して、「(人が喜んで)飛ぶように高く跳ねる」という意味になっている。つまり、「飛ぶ」の本義から離れてしまっているので、テ形による言い換えが不可能になる。一方、(6)の「回って見る」の言い方はそれ自体として間違いではないが、「回って見る」テ形の場合、「ある領域内であちらこちらに歩いて(移動して)そこで見る」という字義の意味になるので、複合動詞の「見まわす」文脈とそぐわない。体全体を回す=移動させることではなく、頭だけを回しながら見る場合ならば、「見回す」という複合動詞を用いなければならない。つまり、「飲み歩く」場合と同じく、対象の範囲が小さくなり、動詞の意味が抽象化されているのである。

以上、複合動詞と単純動詞の意味変化の段階それぞれ自体はほぼ一致していることが分かった。しかし、複合動詞がテ形に言い換えられるかどうかのテストとして一番重要なのは、単純動詞の意味と比べて、複合動詞を構成する単純動詞の意味がどの段階まで変化しているか、あるいはどの段階でとどまっているかという意味階層の対応関係なのである。

考察のまとめとして、複合動詞とテ形の言い換えの関係を以下のように整理しておこう。

(26) 複合動詞とテ形による言い換えの関係

- a. 「～こと」で言い換えられる複合動詞はテ形で言い換えられない(聞き忘れる vs. 聞くことを忘れる, 鳴き交わす vs. 鳴くことを交わす)。
- b. 複合動詞と同様に、テ形も並列、原因、付帯・様態、手段の意味関係が表せる(泣き叫ぶ vs. 泣いて叫ぶ, 切り落とす vs. 切って落とす)。
- c. ただし、bの場合でも、複合動詞の一方の意味が比喩化、抽象化、形式化されている場合はテ形による言い換えはできないので注意が必要である(見落とす vs. *見て落とす, 飛びあがる vs. *飛んであがる, 取り調べる vs. *取って調べる)

(26c)を確かめるには、「誤りを見落とす」→「誤りを見て(誤りを)*落とす」,「飛び上がって喜ぶ」→「*飛んで喜ぶ, *あがって喜ぶ」—というように、単純動詞でパラフレーズしてみるとよい。言い換えができない場合は、比喩化、抽象化、形式化が生じていると考えられる。

5. 結び

複合動詞の問題は、語彙的に結びついた二つの動詞が重層的な意味を含んでおり、いくつもの階層にまたがって派生することにある。その中には、テ形の意味と類似した階層と、テ形とは区別される階層がある。それによって学習者には誤解が生じやすいので、教える側は学習者にこの点に十分注意を喚起させなければならない。

複合動詞は、統語的基準によって最初に語彙的複合動詞と統語的複合動詞とに分かれる。さらに、語彙的複合動詞は、意味的な基準で並列、付帯、原因、手段と補文関係など5つのタイプに分類される。それらはテ形の用法と一致するため、言い換えができる場合が多いが、しかし他方、パラフレーズ出来ない場合もあるため、学習者の誤用も招きやすい。本稿では、「て」で二つの単純動詞を結びつけるテ形と、複合動詞の形とでは、どこに相違があるかを説明するために、単純動詞の意味と複合動詞の前項または後項動詞の意味について、意味階層ごとに比較した。その結果、両方はほぼ歩調をそろえて変化していくことが分かった。さらに、複合動詞をテ形に言い換えるテストを実施し、単純動詞の意味階層と比較しながら、複合動詞を正確に理解すること、本義・転義の段階まではテ形による言い換えが可能であるが、抽象化や形式化の段階にある動詞の場合には、テ形などの類似表現では言い換えられないことを示した。複合動詞を教える際には、(26)のような形で学習者にこの相違について理解を促し、類似表現との混乱を避けるように指導しなければならない。

今後の課題として、さらに多くの複合動詞例を取り上げ、テ形との言い換えの容認度を日本人母語話者に実際に判断してもらうことである。もう

ひとつは、動詞の本義・転義を取る段階と、抽象化・比喩化の段階の間の境界をさらに明確化にしなければならぬ。

参考文献

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房。
 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版。
 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』 研究社出版。
 佐治圭三 (1992) 『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』 ひつじ書房。
 長嶋善郎 (1976) 「複合動詞の構造」 『日本語講座4日本語の語彙と表現』 大修館, 63-104.
 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房。
 松本 曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」 『言語研究』 114, 37-83.
 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」 講座日本語教育, 第14分冊, 69-86.
 森田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』 明治書院。
 森田卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院。
 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』 ひつじ書房。
 吉永 尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』 和泉書院。
 時枝誠記 (1956) 『例解国語辞典』 中教出版。